

## 星とドームと博物館

小山ひさ子\*

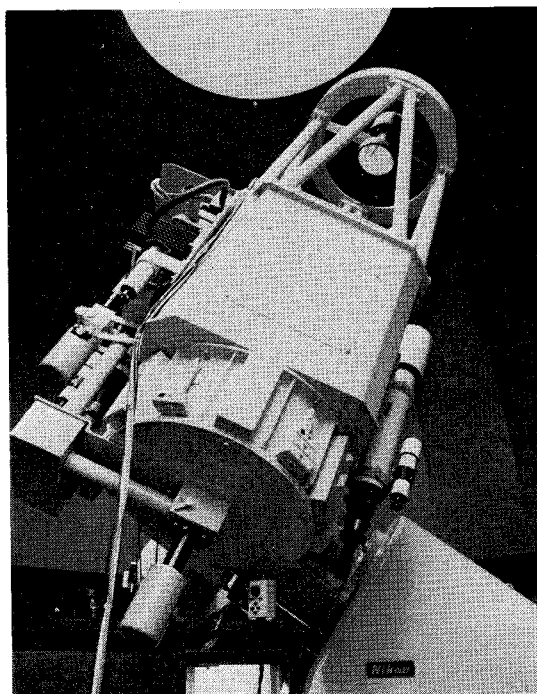
### ☆ 望遠鏡との出会い

変光星の観測ノートを持って、モンペ姿で、初めてこの科学博物館の天文研究室をたずねたのは、東京に戦争の気配が日毎濃くなっていったころである。当時、天文研究室の囑託をされていた古畑正秋先生は、初対面の私に観測の整理法などについて、いろいろと親切に教えて下さった。「大谷さんという若い人が、いま望遠鏡室にいるから会ってごらんさい。」と屋上ドームに案内された。この星の友第一号は、現在、東京渋谷の五島プラネタリウムで星の解説に活躍しておられる大谷豊和氏その人である。

ご存知のように科学博物館は今年 11 月で開館 100 年を迎えるが、本郷湯島の聖堂内からここ上野公園に移転してきたのが昭和 6 年。新しい建物と一緒に 20 cm 屈折望遠鏡が新設され天文分野の活動が始った。

この望遠鏡と私との縁は戦後になって、見せてもらう人から見せる人へと逆転した。

遠くまで見通せる焼け野原の東京は、美しい星空に恵まれていて、黄道光も天の川も輝くばかりに見られたのである。私よりほんの数ヶ月おくれて村山定男氏も職員になられ、夜毎、変光星その他の天体写真が 20 cm 屈折に同架のアストログラフ（口径 10 cm, F4.8）で盛んに写されたものだ。戦争で閉鎖されていた展示室も、標本や資料が疎開から帰り、天体観望会をトップにいろいろな行事が復活していった。日月食などの天文現象が話題をさらっていたのは云うまでもない。特に 1956 年の火星の大接近の観望会は当館始って以来の大変なさわぎとなってしまった。火星を一目見ようと 3000 人をこえる観望者の行列が本館を取巻いて延々とつづき、夜半までかかっての観望公開が 3 日間もつづく有様で、中には限られた数秒の観望時間を得るために朝から待ったという人も多い。猫の手も借りたいそんな時、陰の力になって活躍してくれたのは日本天文研究会の例会に集るメンバーである。日本天文研究会の例会は 1945 年 12 月から毎月第一日曜日に当館で例会を開いてきて、この 6 月でもう 380 回となった。また 1946 年 4 月からは、毎月第三土曜日に日本天文学会と共催で天文学普及講座が開かれるようになった。第一回目は当時の東京天文台長、関口鯉吉氏の「太陽の話」、他に水野良平氏の連続講演があり、



60 cm 反射望遠鏡

500 名の聴講者が講堂を埋めた。この講演会はその後天文学普及講演会と名称が変わり、当館の主催となって今日もつづいている。

### ☆ 太陽と宇宙

さて、ここでしばらくの間、博物館の天文展示室にご案内させていただこう。正面玄関から入って、一階の「生物の進化」二階の「適応と進化」等のテーマ展示を見終って三階への階段をのぼると、正面に白鳥を浮かせた夏の天の川が輝いて見える。「わあー、太陽と宇宙だ」子供たちがきまって歓声をあげながら駆け上るのがこの階段である。「太陽と宇宙」と表示された展示室に入ると先ず大きな月と対面する。直径 116 cm に作られた三百万分の一の石膏模型で、スポットライトで毎月のみちかけの様子が日付と連動して示されてゆく。スイッチを押すとアポロヤルナの着陸地点が光る。村山氏等と手分けして毎夜おそくまで、この大きな球と取組んで山脈やクレーターの一つ一つを裏側まで書込み、それを雪だるまのようになって模型屋さんが掘り込んだものである。ためしにここでシャッターを切ってみるのも面白い

\* 国立科学博物館 H. Koyama

だろう。渋川春海の作った天球儀、地球儀、国友藤兵衛の反射望遠鏡とそれで観測した太陽や月の記録、岩橋善兵衛の江戸時代の遠眼鏡など、我が国の天文史を背景にした展示、ガリレオやニュートンの望遠鏡のレプリカ、また、岡山天体物理観測所の 188 cm の模型は実際に鏡を磨いて入れてあるので光路がわかるようになっている。ここから上を見上げると 60 cm 反射望遠鏡とドーム内の一部がみえる。この望遠鏡は 1973 年に新設されたもので主としてテレビシステムによって太陽の  $H\alpha$  像を展示室に写し出すようになっている。これと全く対照的な望遠鏡は、東京天文台創立時代、麻布天文台の花形であったトロートン社製の 20 cm 屈折である。これらの展示に当っては、東京天文台や岡山天体物理観測所の諸先生に大変お世話になった。一番奥の突当りには太陽から見た恒星の分布を示す模型がある。150 光年より近い明るい主な星々を立体的に浮かせて作られており、スイッチを押すと星座の形がくずれて 5 万年後の星空に変わる。この展示室で一番手がかかり苦勞した模型である。アポロ 11 号、17 号の月の石も人気者だが、最も自慢とするものは宇宙からの訪問者、隕石である。我が国最大の気仙隕石 (135 kg) と田上隕鉄 (174 kg) をはじめ、日本に落下した大部分の隕石がここに集められていて、シャワーとして有名な美濃隕石は地図模型の上に点々と置かれ、隕石の落下分布の状況が俯瞰できるのも面白い。「隕石らしい石を持っているのだから見てほしい。」との問合せは多い。「千三つ屋というが、千に三つ位しか本物はない。」と村山氏はよく云われるが、このところ幸運にも同氏によって一年足らずの間に 3 個もの日本の隕石が確認されている。

4 年位前、三階の陳列室でテレビジョンによる太陽観測の公開が始まるまでは、20 cm 屈折で白紙の上に直径 30 cm に太陽を投影して公開していた。「太陽は熱が強いのので直接のぞくと眼を焼きます。この紙に写っている明るいところが太陽で、黒いしみのようなのが黒点ですよ。地球の大きさはこれ位。」と直径 3 ミリ足らずの円を書いてみせる。「わあーすごい」わかったようにうなづいた観覧者の続いて出てくる言葉は「それでどうやって見るの?」こんな会話のくり返される毎日であった。うっかり眼をはなしていると投影板に首をつっ込んで覗こうとする人が多い。やっぱり望遠鏡は覗くに限るものらしい。また、公開の合間をぬって 30 cm 投影像のスケッチが 1947 年以来続けられている。

天文活動のレコードホルダーは何といても夜間公開である。毎週土曜日、晴天のときは休むことなく観望会が開かれる。天文ブームのこの夜間観望に集まる人はますますふえてきている。3 等星を探すのに苦勞する上野の空での救いは月と惑星の見える夜である。月の

クレーターや土星の環に歓声をあげてみつめる人達に、昔のオリオンやアンドロメダのあの美しい星の光りを見せてあげたいといつも思う。

## ☆ 珍問奇問

ちまたにあふれる天文書のおかげでか、曇っていても望遠鏡なら星が見えると思い、泣き出しそうな曇天にやってくる、何とか見せてほしいと無理をいう人はなくなったが、珍問奇問はまだあとをたたない。相当の時間を奪われるのが質問である。近頃一番多いのが太陽の高度方位と日の出、日の入り、これは日照権にからんでのまきぞえである。次いでが二至二分、会社のレジャー計画やカレンダー屋からの問合せらしい。前にも書いたように隕石についても近頃は多い。「大きな音がしたので出て見たら、こんなものが落ちていた。」「おじいさんが隕石だと床の間にかざっていた石で」と遠路をわざわざ持って来られる地上の石ころやヨークスのもえがらを、一応丁寧に拝見し、「残念でしたね」となぐさめて帰す村山氏である。博物館の屋上には 1 m の大きな日時計があるので、作り方を教えてほしいという人がかなりやってくる。特に小中学校の卒業記念に作りたいというのが多い。幾たびも足しげく通ってきた先生から、「やっと出来上りました」と礼状に写真をそえて送ってこられるのは一番うれしい。「天体写真を貸して下さい」と高校生がやってきた。「文化祭ですか?」「コンクールに出すので」「?」インスタント時代はついに天文界へも進出してきた。円盤を写したと真剣な顔で写真を持ってきた東大の学生がいた。日時と方角をきいてみれば、UFO の正体見たり、正に雲間にみえかくれる傾きかけた上弦の月。一番閉口する相手は、気象庁から天文台とたらい回しにされてやってくる町の哲人。「今の天文学は間違っている」と自らの創案による天動説や宇宙論を大きな声でまくしたてる。対話は禁物、ひたすら逃げるのみ。

博物館の裏方さんはいそがしい。望遠鏡や展示のメンテナンス、公開、観測、資料整理と「雑用天文学」の数々。あつという間に一日が終り、一と月がたち、一年がすぎてゆくのである。

## 学会だより

### 東京天文台一般公開

東京天文台の一般公開(本会后援)が10月22日(土)に行われる予定です。台内諸施設の公開は午後2時から午後4時30分まで、月面観望は午後7時30分まで行われます。天候の都合により観望終了時刻を繰り上げることがあります。なお、雨天の際には中止され、また当日参観を目的の自動車の構内乗入れは禁止されます。

幼児は保護者の同伴をかならずお願いします。